

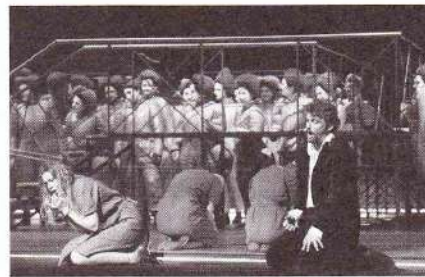
Scramble Shot



ま、砂漠、乾き、迫る死を表現しなければならぬからだ。カウフマンとオポライスの体当たりの演技と外見があったからこそ、カーテンコールで「ブラヴォー」と「ブー」のバランスが取れたのだろう。

益々バリトン寄りの響きが気になるカウフマンは、冒頭からどんどん調子を上げた。堅実な歌唱を聴かせたオポライスは、本来のこの役には声が軽過ぎ、高音で頑張り過ぎる部分があったが、これも幕が進むうちに、マノンらしくなってきた。レスコーのマルクス・アイヒェ、ジェロンテのロランド・ブラハトなどが平均的な歌唱を披露した中、エドモンドのディーン・パワーが光っていた。

アラン・アルティノグリユの指揮は、オーケストラと美しい音をたくさん紡ぎ出したが、プッチーニの音楽的ラインが皆無に近く、歌手と合わない部分も多かった。四角四面にきっちり振る彼の指揮法でプッチーニを操るのは難しいであろう。しかし全体的に見れば充実した一夜であった。(中 東生)



カウフマン主演、バイエルン州立歌劇場《マノン・レスコー》
©Wilfried Hösl

Opera バイエルン州立歌劇場の 《マノン・レスコー》

バイエルン州立歌劇場の今シーズンのハイライトであったネトレブコ&カウフマンの《マノン・レスコー》への注目度は、初日2週間前の「ネトレブコ、キャンセル」のニュースで頂点に達した。演出家ノイエンフェルスとの意見の相違ということで、代役は、同役でカウフマンと共演経験のあるクリスティーネ・オポライスが務めた。メットの《ボエーム》再演契約を特別に解約してもらい駆けつけたという彼女は、予想通りこの演出のマノンには適役であった。若さ、軽やかさがないと、この演出のマノンは全うに死ぬこともできない。なぜならば、第4幕は何もない黒い舞台の上で、立ったま

